

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1857号 2007年01月04日(木)

明けましておめでとうございます。良い年未年始だったでしょうか。天気は皆さんがどこに住んでいるかで違っているのですが、東京は比較的穏やかな正月だったような気がしました。あまり大きなニュースもなかった。

金融市場の大きな状況を描写してみると、「円安、株高、商品安」ということになる。円安はドル・円よりはむしろ年始早々の対欧州通貨での円安が目立った。ポンド・円は私の記憶では234円台の後半があったし、ユーロ・円は158円台乗せもみせたようです。4日の東京市場ではやや円が戻している。ドル・円も119円台前半。

欧州通貨高には背景がある。今朝のFTには「Big fall in jobless confirms German recovery」の見出しで、エコノミストも「最初数字を見直した」というほどの失業者数の減少がある。駄目だと言われていた欧州の景気が、ロシア経済の好調や東欧経済の力強い回復で着実に強さを取り戻していると考えられる。これが欧州金利の一段引き上げ、さらには欧州通貨のさらなる上昇に繋がるのか。購買力平価から言っても、やや円安が過ぎているような印象はする。

年明けから目立ったのはアジア、特に中国とインドの株高でした。インドの株は昨年未にちょっと高値警戒感から波乱状態だったのですが、SENSEXで明確に14000を抜いてきた。もっと強さを感じたのは中国の株です。中国株はいろいろな市場で取引が行われているので一概には言えないのですが、ハンセン指数の上昇は実に印象深いものだった。この強さを東京市場がどう受け止めるのか。

商品相場では、原油相場の下げが目立った。バレルで60ドルを大きく割っての展開。しかし、長期的には原油価格の高値維持見通しが強い。去年の後半に見られた商品相場の下落が一時的だったのか、それとも継続的なものなのかは徐々に明らかになる。筆者は商品相場の高原状態が続くと考えている。

インド、中国の経済が今年も強いのは予想できるとして、見方が分かれる、見方が揺れるのはアメリカ経済でしょう。年明け早々からニューヨークの株式市場は、この「見方の揺れ」で株価もスイングした。予定より一日遅れで発表された昨年12月のFOMC理事会の議事録に、一部の理事が米景気の先行きに懸念を示したというのがきっかけになって、朝方ダウで110ドル以上上がっていたのにその後は反落。ウォール・ストリート・ジャーナルはその間の事情を以下のように報じている。

「But "several" of the Fed's 11 voting policy makers thought the "subdued tone" of some recent economic indicators "meant that the downside risks to economic growth in the near term had increased a little and become a bit more broadly based than previously thought," the minutes said. One of those members, who the minutes didn't name, felt the statement released after the meeting should say rates could be either raised or lowered depending on the evolution of growth and inflation」

利食いの口実になっただけという見方もあるが、FOMCの大勢の見方はまだ「インフレ警戒」ですから、ニュアンスによって随分違う。日本経済の踊り場説と同時に、アメリカ経済の先行きに対する議論は今年も喧しいでしょう。

この号は、新年のご挨拶の号です。皆様には良い2007年をお迎えください。

《当「ニュース」は住信基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したものです。正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》